

優秀賞

家族の絆を繋ぐ生命保険

高知県 高知中学校 二学年

本田 恵太

四年前の秋、母がガンになった。

あまりにも突然のことであり、僕の頭の中は真っ白になった。

僕は当時、小学五年生であり、どうすればいいのかわからなかった。僕の家は母子家庭であり、母が突然、ガンという病気で働けなくなり、最悪の場合、兄弟妹の三人だけになってしまうのではと考えると、とても恐ろしかった。母のことを考えると、夜も眠れず、不安でいっぱいだった。

母がガンと知った日から、一週間程たった日、僕は母に自分の抱えている不安な思いを、弟や妹がいないところで話してみた。そうすると母は、

「びっくりさせてごめんね。下の子たちにはまだ病気のことを話してはいないけど、お兄ちゃんには、ちゃんと話して、理解して、協力して欲しいと思って話したのよ。まだ小学生だから辛いと思ったんだけど、やっぱりちゃんと話しておきたくて。」

と、母は僕の手をとり、落ちついた声でゆっくり病気の症状のこと、治療のこと、僕たちがこれからどうしていくのかを話してくれた。

「今のところお兄ちゃんは今まで通りに生活をしていかまわらない。お母さんは薬で治療をした後、手術をする予定になっているの。治療の期間がどのくらいかかるか今はわからない。ときどき、家のお手伝いをお願いするかもしれない。そのときは頼んでもいい？」

母は僕が不安に思っていることを一つずつ安心できるように話してくれたが、母の体の状態がわかると、次は将来のことが不安になった。母がしばらく働けないと、今の生活は続けていくことができなくなるだろうし、僕の家は母子家庭であり、収入は母一人である。僕には下に小二の弟と幼稚園児の妹がいる。今でも母は僕たちのために、休みなく働いているが、治療となると、今までのようにできなくなる。そうなると長男である僕がすぐ働かなくてはならない。そして、幼い弟や妹の面倒も僕がみなくてはならないと思うと、このうえもない不安で胸が押しつぶされそうになった。

「お母さん、ガンの治療ってとてもお金がかかるんじゃないの？僕、今は働けないけれど、中学生になれば働こうか？」

と、恐る恐る聞いてみた。すると母は、にこっと笑って、

「大丈夫よ、お兄ちゃん。お母さんはこのような、いざというときのために、仕

第56回中学生作文コンクール

事を始めたときから、ずっと保険をかけてきたの。ケガをしても保障はあるし、今回のようにガンになっても治療もできるし、手術もできる。それから保険の内容にもよるけど、一時金なんかもあるし、治療している間、働けないけど、それを保障してくれる保険もあるの。若いときは今からかけても意味はないのかなって思っていたけれど、いざ自分が病気になると本当に生命保険ってありがたい。まあ、病気にならないのが一番よね。お母さんはまだまだ子供たちと一緒にいたいし、頑張っていくから、安心してね。」

母の言葉には重みがあり、そして、僕たちに対する深い愛情が感じられた。

母が病気になるまで、まったく生命保険というものすらよく知らなかった。今回母がガンになって僕は生命保険というものは、なんてすごいもので、保険は元気なときにしか加入できない種類が多く、若いときに入ると保険料が少なくてすむということも知ることができた。もちろん、病気にならないことが一番だが、医療が進歩して平均寿命が延びている今だからこそ、生命保険は大切だと思う。

ガン告知から四年経った今、母は治療をしながら、僕たちのために元気に働いてくれている。僕たちが、以前とかわりなく毎日を過ごしているのは本当に生命保険のおかげである。僕にとって生命保険とは「家族の絆を繋ぐかけがえないもの」である。